



— 福岡市子ども読書推進計画（第4次） —

広げよう 子ども達の本の世界 共につくろう ことば輝くまち

福岡市では、子ども達が心豊かに生きていくために、自ら読書を楽しみながら、人との関わりの中で読書の楽しみを広げ、ことば輝く本の世界を共につくることを目指して、子どもの読書活動を推進していきます。

近年の小学校や中学校の子ども達の読書活動を振り返った時、学年が上がるにつれて、1か月に1冊も本を読まない児童生徒の割合が増えるなど、読書離れの傾向が伺え、読解力の形成に対する影響も懸念されています。

このような状況の中で、子どもの読書活動を推進していくためには、乳幼児期から児童・生徒期まで、年齢や発達段階に応じて、子どもの琴線に触れる書籍と出会える環境を、保護者や周りの大人達が積極的に構築するとともに、子ども達がメディアの利用の在り方に関する啓発を含め、社会全体で子どもの自主的な読書活動を支援する取り組みを行う必要があります。

今後も、家庭・地域、学校、図書館等が連携して、福岡市子どもと本の日（毎月23日）を中心に、子どもが保護者、友達、先生など身近な人達と一緒に本を読んだり、読んだ本について感想を伝え合ったりする「共読」などを行い、子どもの読書活動を推進していきたいものです。

福岡市では、1か月に本を1冊以上読む
子どもの割合 69.1%（令和3年度調査）を
令和10年までに5%増を目指しています。



また、公益社団法人『読書推進運動協議会の2024・第66回「こども読書週間」開催についてのお願い』の中に、「家庭における読書環境の整備に重要な3つのこと」として、

- (1) 幼児には、父母が本を読んで聞かせてあげる
- (2) 子どもたちの身近にいつも本を置くことを考え、毎日たとえ短い時間でも本を読むことをすすめ、本を読むのを聞いてあげる。
- (3) 父母みずからが読書する姿を、子どもたちの眼にふれさせる。

という内容の記述がありました。

父母だけではなく、子どもに関わる「身近な大人」や「先生」など、すべての大人が、意識して3つの取り組みを行っていけば、さらに、子どもの読書活動は推進され、心豊かな子どもの育成につながるのではないのでしょうか。

学校図書館となかよしになろう

5月も下旬を迎え入学・進級した子ども達も、新しい環境に少しずつ慣れ始めた頃ではないでしょうか。それぞれの学校図書館では、子ども達に図書館オリエンテーションを行い、気持ちも新たに図書館を開館されていることと思います。

オリエンテーションでは、子ども達が気持ちよく、そして、楽しく利用することができるための「図書館利用の方法や約束」を確認すると共に、子ども達が「早く本を借りたい。」「図書館って楽しそう。」と、本との出会いへの期待を高めることができるようにしたいものです。

また、子ども達が図書館を効果的に活用できるようにするために、国語科学習と併せ、子ども達の発達段階に合わせた指導を行うと効果的です。

<福岡市の各学年の国語科学習内容>

学年 題材名	内 容
1年「としょかんへいこう」 1年「としょかんとなかよし」	図書館のマナー 表紙と題名を手がかりに読みたい本を見つける 読書記録
2年「図書館たんけん」	本の分け方、本のならべかた 読書記録
3年「図書館たんていだん」	本の分類について 読書記録
4年「図書館の達人になろう」	本のラベルや司書の役割 読書記録
5年「図書館を使いこなそう」	日本十進分類法 読書記録
6年「公共図書館を活用しよう」	公共図書館、地域の施設の活用 読書記録



6月のことと人

6月4日～10日

「歯と口の健康週間」

日本歯科医師会が「む(6)し(4)」と読む語呂合わせで、1928年から6月4日を「虫歯予防デー」に制定した。2013年より6月4日～10日を「歯と口の健康週間」として、口腔衛生の大切さを広める週間としている。

6月16日「父の日」

1909年に、アメリカのソノラ・スマート・ドットが、男手1つで自分を含む子供6人を育ててくれた父を讃えて、教会で父の誕生月の6月に礼拝をしてもらったことがきっかけであると言われている。最初の父の日の祝典は、翌年の1910年6月19日に行われた。

北川 千代

(1894.6.14～1965.10.14)

埼玉県生まれ。児童文学作家。『アンクルトム物語』『母をたずねて』『ピーターパン』『みつばちマーヤの冒険』『黒馬ものがたり』『家なき子』など、広く知られる海外作品の再話の著者で有名である。日本児童文学者協会の千代の名を冠する「北川千代賞」は新人児童文学者の登竜門となっている。

ウイルバード・オードリー

(1911.6.15～1997.3.21)

イギリス生まれ。キリスト教聖職者、児童文学作家。TVシリーズ『きかんしゃトーマス』の原作である『汽車のえほん』シリーズの作者として知られる。

幼い頃、家のそばのトンネルを蒸気機関車が走り、聞こえてくる蒸気や機関の音に、機関車の意志を感じたことが、後に『汽車のえほん』の誕生へと繋がる。

池井戸 潤

(1963.6.16～)

岐阜県生まれ。元銀行員の経験を生かして、金融界など企業小説に手腕を発揮。働く人々の姿を真摯に描く。『半沢直樹シリーズ』『空飛ぶタイヤ』『下町ロケット』『陸王』など、幅広いジャンルのエンタメ作品に挑戦している。2023年『ハヤブサ消防団』にて、第36回柴田錬三郎賞を受賞する。

佐野 洋子

(1938.6.28～2010.11.5)

中国北京生まれ。日本の絵本作家、エッセイスト、児童文学、脚本、小説、海外絵本の翻訳も手がけた。代表作として、1977年に刊行した絵本『100万回生きたねこ』が有名。また、2000年にエリック・カール作の絵本『こんにちは あかぎつね!』の翻訳で日本絵本賞翻訳賞している。

図書館員のひみつの本棚 第 217回

今月は、楽しい冒険の絵本を紹介します。

『まぼろしの巨大クラゲをさがして』 クロエ・サベージ／作 よしい かずみ／訳
BL出版(2024年) ¥1800(税別)

<お勧め年齢>

乳幼児★★☆ 小低学年★★★★ 小中学年★★★★ 小高学年★★★★ 中学生★★☆

高校★★☆ 一般★★☆

(★が多い年齢の子どもにお勧めです)

<本の紹介>

モーリー博士たちは遠い北極海にいるという幻の巨大クラゲを探す冒険の旅に出ます。しかし、どんなに探しても巨大クラゲは見つかりません。とうとうあきらめかけたその時に、巨大クラゲが氷山のすきまからひょっこりと…。題名だけを見ると科学絵本のような印象を受けますが、北極海の自然や生きものたちが俯瞰的に美しく描かれ、一所懸命な博士たちの様子やかくれんぼを楽しんでいるかのような巨大クラゲのユーモアたっぷりの愛らしい姿が楽しい、わくわくするおはなしの絵本です。

<子どもに手渡す時のポイント>

難しい科学的な説明文はないので幼児からでも楽しめるでしょう。博士たちは巨大クラゲを見つけられずに悪戦苦闘しているのに、絵本を読んでいる私たちには巨大クラゲが博士たちの船のすぐ近くでかくれんぼしているのがわかるので、ページをめくるたびに「ほら、そこにいるよ～」って楽しい声があがりそうです。冒険や自然に興味を持つきっかけとしてもおすすめの絵本です。



このコーナーで紹介した本はお近くの図書館や書店に置いてあります。ぜひ手にとってみて下さい。